

「時に市兵衛、當時は何か珍しい藝人共はお前の宅に泊つて居らんか」

「ヘイ、此間中から上方の藝人が一人泊つて居ります」

「ハ、ア何藝人ぢや」

「エー嘶家でございます」

「フム、嘶家とは夫れは面白い、此度お姫様の御病氣に就いて、何かお氣慰みに面白い藝人があれば伴れて來いと仰せに依つて、身共が其方の宅へ参つたやうなことぢやが、その嘶家を夕方から伴れて参る譯には行くまいか」

「ヘエ〜結構で、伴れて罷り出でますでございます、夫れでは旦那様、夕方から伴れて参りまして宜敷うござりますか」

「フム、夕方に通用門より伴れて這入つて呉れ」

「ヘイ、承知仕りました、左様なら後刻お伺ひ致します」

「然らば市兵衛、確と頼んだぞ」

「宜敷うござります、取込みましてお茶も差上げませいで」

「イヤ〜此方は尙だ他に用事も之有から、夫れでは市兵衛必らず夕方に伴れて参れよ」

「畏りましたでございます、……オイ二階の泥丹坊堅丸先生、一寸此方へ降りておいで」

「ハイ旦那、何ぞ御用で」

「好い招聘がかゝつたで」

「ヘイ、好い口とは」

「此の處の殿様のお姫様が御病氣で、お蔭に臥しておいでなさるので、お氣慰に何ぞ面白い事を演る藝人はないかと菅沼軍十郎様といふ御武家が今はお頼みに見へた。何しろ御前へ出て嘶をお聞かせ申せばお前の名譽でもあるし、就ては何うせ大した御禮金が下るやろう」

「それはどうも有難うござります」

「今の間にお風呂へでも浴つて身體をチャンとこしらへて置きなされ」

「大きにどうも」

それから拵らへをして待つて居りますと、

「サア先生、身仕度は出來たかな」

「ヘイ。チャンと出來てます」

「ア、然うか、夫れでは徐々に出掛けやうか」

「ヘエお供を致します」

宿屋の亭主は泥丹坊堅丸を伴れて、佐賀の御殿へ指して参りました。通用門から這入つて御玄関の所